

報告**IAU-UNESCO シンポジウム 260****天文学の社会と文化における役割****“The role of Astronomy in Society and Culture”****参加報告****矢治健太郎(立教大学)****○序**

1月19日から23日、IAU-UNESCO シンポジウム 260「社会と文化における天文学の役割(英題:The role of Astronomy in Society and Culture)」[1]が、フランス・パリのユネスコ本部で行われ参加してきました。これは、その前週に行われた、世界天文年 2009 のオープニングセレモニーの続きのような感じで行われたものです。私は、大学の補講なんてのが入ったため、20日から参加しました。

このシンポジウムには世界 59 ヶ国から 384 人(参加者リストによる)が参加しました。アジアからの参加も多く、中国、韓国はもちろん、インドネシア、ネパール、フィリピン、モンゴルなど 14 の国から参加していました。日本からは私を含めて 6 名の参加者でした。そのほかの内訳としては、ヨーロッパが 22、北中米が 4、南米が 6、アフリカが 11、オセアニアが 2 カ国でした。

○参加のきっかけ

私がこのシンポジウムのことを知ったのは 11 月末頃。来年行われる研究会やシンポジウムの日程をいろいろ調べていたら、このシンポジウムの存在を発見。セッションの中には天文教育普及に関係するものがありました。一度、天文教育普及をテーマにした国際シンポジウムに参加してみたいと常々思っていた私は、日程を確認して、参加申し込みを行いました。

ところが、実はヨーロッパに行くのは全く

**シンポジウム会場の様子**

の初めてということもあり、フランスの空港についてから目的地のユネスコ本部に行くまで、無事にたどりつけるかどうか不安いっぱい・緊張しっぱなしでした。ユネスコ本部で、知り合いの日本人に会えたときは非常にほっとして、まさに「やっと、たどり着いたー」という感じでした。

○シンポジウムの概要

シンポジウムでは 5 日間に全部で 26 のセッションがありました。毎日午前中は全体でシングルセッション、午後は 4 から 6 のセッションが平行で走ってました。従って、セッションによっては、20 人ぐらいと少ないところも。各セッションのテーマ名を全て書き出すのは大変なので、ここではそのキーワードを抜き出すことにします。

文化(culture)、天文遺産(heritage)、歴史

(history)、芸術(art)、社会的影響(social impact)、メディア(media)、技術(technology)、環境(environment)、プラネタリウム(planetaria)、アマチュア天文学(amateur)、大衆理解(public understanding)、教育(education)、ハンズオン(hands-on)、情報社会(information society)。

以上のキーワードから、ひとくちに「社会と文化における天文学の役割」と言っても、非常に多彩な話題が取り上げられていることがわかります。「芸術」をテーマにしたセッションは、さらに「文学・音楽」「構造物・映画」「絵画・彫刻・建築」の3つのセッションに分かれて、発表が行われました。また会場には、天文・宇宙をテーマ・モチーフとした絵画や彫刻が展示されていました。「エドガー＝アラン＝ポーの宇宙論」という発表タイトルもあって、ある日本人参加者は「もう、こんなの発表していいのかというくらい、趣味の世界ですよ」なんて言ってました。

ただ、いろんな人から「このシンポジウムの運営かなりいい加減(アバウト)ですよ」という声がありました。それは私自身も感じていて、私の参加申込が当初断られたのが結局受け付けられたり。勝手に発表者にされた人がいたり。他にも、発表セッションが二転三転する人や、受付デスクが午後にはクローズしていたり、などなど。別の日本人参加者からは「天文学の国際会議って、こんなにアバウトなんですか？」と聞かれてしまいました。

○おもしろい発表

とはいえ、紹介したキーワードからわかるように、興味深い発表・講演がいろいろありました。また、いろいろな国の天文学・天文教育事情を知る機会となり、新しい発見がありました。私は、主に「教育」「メディア」「大衆理解」のセッションを中心に聞きましたが、帰国後にプログラムを見直して「これも聞く

んだった」と思うものがたくさんあり、非常に後悔しました。特に「天文遺産」のあたりとか。以下、私に関心をひいた話題を順不同で紹介します。

「教育」のセッションでは、なんと、2006年に宇宙マイクロ波背景放射の研究でノーベル物理学賞を受賞した G・スムートが「宇宙論の教育的側面」というタイトルで発表をしていて、驚きました。ほかにもハーシェル衛星など科学衛星を使った教育利用の構想や、国際天文学連合が行ってきた IAU スクールの紹介もありました。

「プラネタリウム」のセッションでは、エジプトからの発表者の非常にハイテンポな発表に圧倒！ひとこと言うたびにスライドが次々繰り出されるのに唖然としました。

UAE の人の発表も、イスラム教と天文学の関係ということで、三日月とかラダマンとか初めて聞く話ばかりで非常におもしろいものでしたが、話題豊富のため、時間オーバーで座長から発表を止められる一幕がありました。

中国からは世界天文年の取り組みを熱心に紹介した発表がありました。また、世界天文年のロゴを活用している発表も目立ちました。

南アフリカの天文学者がポスドク合わせて 63 人しかいないというのは驚きでした。南アフリカといえば、南半球の著名な天文台が多いところ。それでも、他のアフリカの国々の天文学の教育に貢献しているとのことでした。

ネパールからの参加者が多いことにも驚きました。ネパールでは天文学が非常に活発らしく、若い研究者といろいろ話しました。

「メディア」関係のセッションでは、CAPjournal[2]というジャーナルの紹介がありました。CAP とは Communicating Astronomy with the Public の略です。Communicating Astronomy は日本語でなんと訳そうといまだに迷うのですが、天文普及やアウトリーチをテーマにした国際レビュー

一誌で、ウェブ上で公開されています。

日本人の口頭発表は2件ありました。一人は国立天文台の渡部潤一氏で、「スターウィーク」の取り組みを紹介しました。日本の背景として、工業技術の発達、東洋思想、豊富な天文教育施設などをあげて、スターウィークが日本にどのように浸透してきたかを報告し、他の参加者にも関心を呼んでいました。もう一人は総研大の加藤直子氏で、科学社会学の観点から、日本人の石塚睦氏がペルーでの天文学普及に貢献した役割を紹介しました。

○ポスターセッションにて

ポスターセッションでは60件以上のポスター発表がありました。私は、「EPO Activities with Hinode Satellite」、つまり「ひので衛星のEPO活動」という題で発表を行いました。実は事前にポスター発表を申し込んでいたのですが、なぜか受け付けられていない！という事態が。ところが、他の人もそうしてるということで、空いてるスペースに勝手にポスターを貼っつけて、通りかかる人にひのでの画像を説明しました。

また、コーヒーブレイクのときには、ひのでのDVD(英語版)もノートPCを使って流していたら、通りかかる人が割と興味を持ってくれました。特にアルゼンチンとかブラジルといった南米の人が喜んでくれました。他にも、ネパール、ルーマニアや台湾の方も関心を持ってきて、ひのでの成果をがんばってアピールしました。配布用のDVDを50枚持っていきましたが、あっという間になくなりました。私としては、これだけでやって来た甲斐がありました。

○Astronomical Walk～パリ天文台訪問～

21日の午後には、Astronomical Walkと題する2つのツアーが企画されていて、私はパ

リ天文台の見学に参加しました。パリ天文台は割とパリの中心地にあって、ダンフェール＝ロシュロー駅から徒歩5分ぐらいのところにありました。



正面から見たパリ天文台

パリ天文台は1671年に竣工された歴史ある天文台です。敷地内に入るとまず風格のある3階建ての建物が目に入りました。

まずは、1階の展示コーナー。口径30cmぐらいでしょうか？大砲のような風貌の反射望遠鏡がフロアの真ん中にどんと自己主張していました。奥のスペースには古い保時装置が展示されていました。そのあと、屋上にのぼって、天文台の見学。屋上からパリの町並みを一望しドームへ。ドームは外装こそ白っぽい現代的なものでしたが、中に入ると木造の歴史を感じる構造でした。そして、これまた



屋上ドーム内の屈折望遠鏡

口径 33cm の屈折望遠鏡がありました。

3 階に降りて、「カッシーニの間」と呼ばれる子午線室を見学。ここは天井が高いホールのような部屋で、南側の小窓から南中した太陽の光が床に投影され、太陽の高度が測定できるようになってました。床にはパリを通る子午線が表示されていました。

2 階は展示スペースで、昔の地球儀や天球儀、半径 2m はあろうかという四分儀、シーロスタットなどが展示されてました。それだけでなく、最近のヒッパルコス衛星やケプラー衛星の資料も展示して、星の位置測定の歴史がわかるようになってました。このあたりの一品一品は興奮するものがありました。

なお、一般人の天文台の中の見学は事前の予約が必要とのことでした。

○コンサート : The Music of the Spheres

21 日の夜、このシンポジウムの企画の 1 つで、"The Music of the Spheres"と題するコンサートが、パリ郊外のムードンで行われました。余談だが、"The Music of the sphere"(日本語題:天球の調べ)[3]という小説が存在する。天文学をモチーフとしているので興味のある方は読まれたし。

コンサートはパイプオルガンとピアノの演奏でした。が、なんと演奏者はドミニク＝ブルースト、このシンポジウムの LOC のチェア本人でした。なんか CD もいくつか出してるとのこと。演奏曲は、あのウィリアム＝ハーシェルが作曲した曲も含めて 10 曲が演奏される予定…。でしたが、何曲か演奏したところで停電トラブルが発生。パイプオルガンは電気がないと使えないらしく、残りの曲は、ろうそくの灯りの下、ピアノで演奏されました。曲目にはホルストの惑星の火星も入っていたのですが、これは演奏されず。パイプオルガンで弾く予定だった模様です。私として

はちょっと残念。とにかく、いろいろな意味で印象的なコンサートでした。



パイプオルガンを弾くブルースト氏

○最後に

本文中でも触れましたが、多彩な話題が取り上げられて、また、世界各国の天文事情を知ることができて、いろいろと刺激に満ちたシンポジウムでした。

この 2009 年の世界天文年を機に、天文学が社会や文化との関わりを振り返り、意識し、再確認の機会とする、そんな意図を感じたシンポジウムだったと思います。

参考資料

[1] <http://iaus260.obspm.fr/>

[2] <http://www.capjournal.org/>

[3] エリザベス・レッドファーン, 2002, 「天球の調べ」(新潮社)

矢治健太郎